

研究報告

チームおよび多重課題のマネジメントを中心とした 総合実習の修得状況の把握

Comprehensive clinical nursing training focused on team and multitasking management.

宇野 真由美¹⁾, 鈴木 幸子²⁾
Mayumi Uno¹⁾, Yukiko Suzuki²⁾

要 旨

A 大学は就職後のリアリティショックの軽減を教育課題に、看護管理の授業とリンクさせたチームおよび多重課題のマネジメントを中心とした総合実習を4年次生に実施し、学生の修得状況を把握した。実習記録の内容分析では【報告と情報共有の重要性の認識】、【多重課題・複数受け持ちの困難さの経験】、【リーダー・メンバーシップの経験による学び】、【チームマネジメントの理解】、【総合実習の成果と成長の実感】、【総合実習を経て見出した課題】の6カテゴリーを生成した。テキスト解析の対応分析では、〔観察・アセスメント・コミュニケーションなどの学びを（臨機応変に）対応・変更して実践できる〕、〔(患者の)状態を理解して指導者に伝えに行く〕、〔対象の(状態を)判断する〕、〔看護管理では状況(を見極めること)が重要〕であった。チームのマネジメントは臨地での経験から学ぶことが多く、先輩学生の学びを理論に結びつけて教授することで、より理解が促進される可能性が示唆された。多重課題のマネジメントは、患者理解の基本となる医学的知識として低学年からの知識の定着の必要性が示唆された。一方、複数患者の把握の進度に合わせた指導をタイムリーに行うことで、マネジメントが時間管理やケアの順序性を考えることに留まらず、患者中心の視点に基づくケア計画へ導くことができた。看護管理の授業と総合実習のリンクならではの学びとして、患者だけではなく看護組織や労働者としての視点を持つ特徴が示唆された。

キーワード：総合実習、チームマネジメント、多重課題、トランジション期

I 緒言

新人看護職のリアリティショックによる早期離職や看護教育課程と臨床実践の乖離への対策として、2009年のカリキュラム改正から統合分野が取り入れられて久しい。佐居ら¹⁾は、新人看護師のリアリティショックの要因を「ケアへの対応能力」、「勤務形態への適応」などとし、川西ら²⁾は、看護管理者がとらえた新人看護師が困難となる多重課題場面を「複数の行為での優先度」、「複数のの

との関わりの優先度」、「報告・相談」と指摘した。さらに、新人看護師への移行演習プログラム^{3), 4), 5)}、多重課題演習プログラム⁶⁾、各論実習前に実施した統合実習⁷⁾のなど多様な取り組みの報告がなされ、看護基礎教育課程における多重課題への演習や実習等の必要性が示唆されている。

学士教育課程の多くは大学4年次に統合(総合)実習が位置づけられており、その形態は一定のものが示されていない⁸⁾。A大学は、学生から新人

¹⁾ 京都看護大学 Kyoto College of Nursing.

²⁾ 四條畷学園大学 看護学部 Faculty of Nursing, Shijonawate Gakuen University

看護師へのトランジション期にある4年次生を対象に、就職後のリアリティショックを軽減させることを教育課題とし、「チームおよび多重課題のマネジメント」、つまり、実習チーム内での助け合いや工夫、複数患者へ多種多様なサービスの方法を看護管理の授業とリンクさせた演習と総合実習に取り組んだ。COVID-19禍のため、臨地での実習は予定としていた実習時間の約半分の期間で可能となった。そのため、本研究は教育実践の基礎資料とするために、チームおよび多重課題のマネジメントの修得状況を把握し、プログラムを作成した科目責任者および臨地で指導に当たった教員と臨地指導者の教育実践を振り返る必要がある。

II. 目的

本研究の目的は、看護管理の授業とリンクさせたチームおよび多重課題のマネジメントを中心とした総合実習の修得状況を学生の記述から明らかにし、教育実践の基礎資料とすることである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、記述データを質的に内容分析することと、テキストマイニングと関連解析から数量的に分析するデザインとした。

2. 研究協力者

2021年度にA大学の総合実習を受講した4年次生79名を対象とした。

3. データ収集期間

2021年10月

4. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する四條畷学園大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号2021001）を得た。施設代表者と研究協力者に、口頭と文書で研究の主旨を説明の上、成績開示後に研究協力を求めることで成績評価とは何ら関係がなく、研究への協力は自由意思に基づき、協力をしなくても不利益を被ることが無い旨を保障した。氏名を切り取っての提出につき、提出をもって同意となり、同意の撤回は不可能となる旨を伝えた。

5. 用語の定義

- 1) 多重課題とは、「2つ以上の作業が同時に発生すること」である⁹⁾。
- 2) 事前演習とは、本研究において臨地実習までに複数の受け持ち患者の多重課題をチームでマネジメントすることを称した。

6. 総合実習へリンクさせた看護管理の授業と事前演習の概要

事総合実習の目的に「看護管理の視点から病棟における複数患者の受持ち、学生チーム運営・多重課題に取り組むこと」が含まれており、リンクさせた看護管理の授業は、「管理の概説」、「看護管理の概説」、「看護ケアマネジメント」、「多重課題のマネジメント」、「医療チームのマネジメント」、「組織マネジメント」、「看護サービスとマネジメント」であった。これらは、第7回看護基礎教育検討会の看護の統合と実践の看護師教育の基本的考え方¹⁰⁾を参考とした。事前の多重課題のマネジメント演習では、事例患者4名の情報を筆者らが作成した。実習時間外の事前演習の主旨は、「複数患者の多重課題に対する看護ケアの優先づけ」、「リーダーとメンバーの役割の把握」、「患者を取り巻く他職種との協働」に焦点を当てた。加えて実習チームの協力体制をつくる準備時間を180分とした。

7. 総合実習の方法

1) 臨地実習期間

実習施設による受け入れが可能な範囲で、以下のA日程からD日程の各期間の実習となった。

A日程：2チーム10名は、5日間午前中のみ臨地で行った。

B日程：4チーム24名は、2日間は一日を通して3日目は午前半日が臨地であった。

C日程：4チーム21名は、初日が午後半日、2日間は一日を通して臨地であった。

D日程：4チーム24名は、3日間は一日を通して臨地であった。

2) 実習病院の特徴

民間の地域医療支援病院である急性期病院2施設で実施した。

3) 実習チームの呼称

実習グループは、チームで看護をするという

認識をもたせるために、事前演習の段階から実習チームと呼称した。

4) 実習の方法

学生全員がリーダー・メンバーを経験する「チームのマネジメント」と学生チーム5人～6人で4人の患者を受け持つ「多重課題のマネジメント」について、臨地での一日の看護実践をもとに「複数患者を受け持ち、多重課題をこなすこと、およびチームメンバーとの協力」について指導を受けた上で実習を実践した。カンファレンスでは学生が主体となり、複数患者の翌日のケア計画を立て、指導者に報告し、指導を受けた上で修正を加えた。

実習内容

- 1) 病院・病棟オリエンテーションを受ける。
- 2) 病棟における看護方式の見学またはオリエンテーションを受ける。
- 3) 受け持ち部屋（1～2部屋で約4名）の患者紹介を受ける。
- 4) 受持ち部屋患者の情報収集をする。
- 5) カンファレンスで翌日の計画を作成し、指導者に確認する。
- 6) 受け持ち部屋の患者の情報収集を行う。
- 7) 受け持ち部屋のメンバー看護師のスケジュールに合わせて、見学と一部実施（バイタルサインズの測定や看護ケアなど）を行う。
- 8) カンファレンスで翌日の受け持ち部屋の患者の予定と学生メンバーの実施見学項目の計画を立案する。
- 9) 学生グループで1～2部屋（4名程度）の患者を受け持ち、情報を共有する。
- 10) 学生グループの中で、リーダーとメンバーの役割をマネジメントし、各受持ち患者へのケアや学生の見学などの計画を立てる。
- 11) 立案した計画が実施可能かについて、臨床指導者に確認し、必要に応じて修正の上、実践を行う。
- 12) 日々、新たな学びを主体的に見出し、考察をする。
- 13) 日々のカンファレンスでは、受持ち部屋の患者に関するテーマを選択し、次の看護に活用できるようにする。
- 14) 最終カンファレンスでは、本実習における

学びを実習目標に基づいてまとめ、今後の課題を見出し、自身がどのような看護師になりたいかについて発表をする。

8. データ収集・分析方法

1) データ収集方法

実習記録の返却時に、本実習の主テーマであるチームおよび多重課題のマネジメントの修得状況を記述した記録用紙「実習の振り返り」の複写をつけて返却し、名前の部分を切り取ることで匿名化し、任意で提出を求めた。提出場所は、鍵のかかるアンケート回収箱を設置し、2週間留め置いた。研究に関係しない業者に提出物のデジタル化の依頼をし、学生個々の筆跡が教員に判別できないようにした。

2) 分析方法

同一のテキストデータを以下の内容分析とテキストマイニング・関連解析で分析した。

内容分析：記述内容を質的帰納的に分析した。本実習での修得に関する内容のデータを抽出した。内容が類似していると判断したものをグループ化し、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化を行った。分析過程においては、研究者間でのメンバーチェックを行うことで信頼性・妥当性の確保に努めた。

テキストマイニング・関連解析：記述されたテキストデータの話し言葉やあいまいな言葉などをコンピュータでデータ解析できるように自然言語処理を行い、単語頻度から全体の傾向を見出した。次に、KH-Coderを用いテキストデータの最も類似する組み合わせからクラスターを形成し、階層を用いたデンドログラムで表現した階層クラスター解析（Ward法）、テキストデータ間の関連性を共起からみた共起ネットワーク抽出（Jaccard係数）を行った。また、テキストデータの類似性を2次元に付置する対応分析を行い、それぞれの分析の解釈としてテキストデータの特徴を見出した。この解釈はテキストマイニングと関連解析の経験のある研究者間で行い、統計解析の専門家からスーパーバイズを受けることで、信頼性・妥当性の確保に努めた。

IV. 結果

1. 回収

回収は20部(回収率25.3%)であり、全てが本研究の分析対象となった。

2. 記述の内容分析

総合実習による修得状況が読み取れたデータ数は115単位であった。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを<>, データを<>>で記す。データを類似性でまとめたサブカテゴリーは25、さらに抽象化した【報告と情報共有の重要性の認識】、【多重課題・複数受け持ちの困難さの経験】、【リーダー・メンバーシップの経験による学び】、【チームマネジメントの理解】、【総合実習の成果と成長の実感】、【総合実習を経て見出した課題】の6カテゴリーが生成された(表1)。

3. 記述のテキストマイニングと関連解析

以下のテキストマイニングと関連解析の結果か

ら解釈できた特徴を〔 〕内に記す。

1) テキストマイニングによる頻出単語

学生の修得状況の頻出単語は、上位から〔患者(125回)〕、〔考える(89回)〕、〔メンバー(78回)〕、〔ケア(75回)〕、〔情報(68回)〕であり、上位から20単語を表2に示す。

2) 関連解析

階層クラスター解析では、〔今回の実習では優先順位を考えてチームで看護を行う〕、〔患者のことを考えて情報共有し、必要なケアを行う〕という修得状況の特徴が見出された。なお、図内の破線はクラスター切断箇所を示す(図1)。共起ネットワークでは、共起性の高いものを楕円で囲んだ。〔チームで患者の看護を行う〕、〔情報を共有し優先順位をつける〕、〔必要性を考えてケアをする〕、〔複数の役割を持つ：多重課題をこなす〕、〔リーダーシップ・メンバーシップをもつ〕という修得状況の特徴が見出された(図2)。対応分析では、用語がほぼ座標原点に集中

表1 各実践論の教育内容

カテゴリー	サブカテゴリー
報告と情報共有の重要性の認識	報告の優先順位を考えることによるチームのスムーズな動き 理由や根拠を含めた報告による共通認識 報告のタイミングとチームへの影響 情報共有の重要性 情報共有による安全なケアの提供 情報共有による質の高いケアの提供 情報共有による患者の把握
多重課題・複数受け持ちの困難さの経験	複数の患者のケアの優先順位を考える 複数受け持ちによるケアの質の担保 複数受けもちの困難さ 複数患者の把握の必要性
リーダー・メンバーシップの経験による学び	リーダーの采配 リーダーの役割の理解 リーダーとしての根拠に基づくケア計画の重要性 リーダーの難しさ メンバーの役割の理解 リーダーとメンバーの良好な関係の重要性
チームマネジメントの理解	チーム運営の重要性の理解 時間管理と臨機応変な対応 看護管理の授業と総合実習の統合的理解
統合実習の成果と成長の実感	統合実習の中での日々の成長(成果・学び)の実感 統合実習の経験から看護実践を見通した理解 統合実習の学びや感想
統合実習を経て見出した課題	統合実習から見出した自己の課題 統合実習から見出したチームの課題

することから、20名がほぼ同様の記述をしていることが示唆された。特徴ととらえた関連する単語を破線の矩形で囲んだ。第1象限では〔観察・アセスメント・コミュニケーションなどの学びを（臨機応変に）対応・変更して実践できる〕、第2象限では〔（患者の）状態を理解して指導者に伝えに行く〕、第3象限では特徴がつかめず、第4象限では〔対象の（状態を）判断する〕、〔看護管理では状況（を見極めること）が重要〕という修得状況の特徴が見出された（図3）。

表2 修得状況を示すテキストデータの出現回数

抽出語	出現回数
患者	125
考える	89
メンバー	78
ケア	75
情報	68
チーム	59
リーダー	57
学ぶ	56
行う	56
必要	53
優先	41
報告	37
共有	36
実習	35
受け持つ	35
順位	34
学生	30
看護	30
課題	27
大切	27

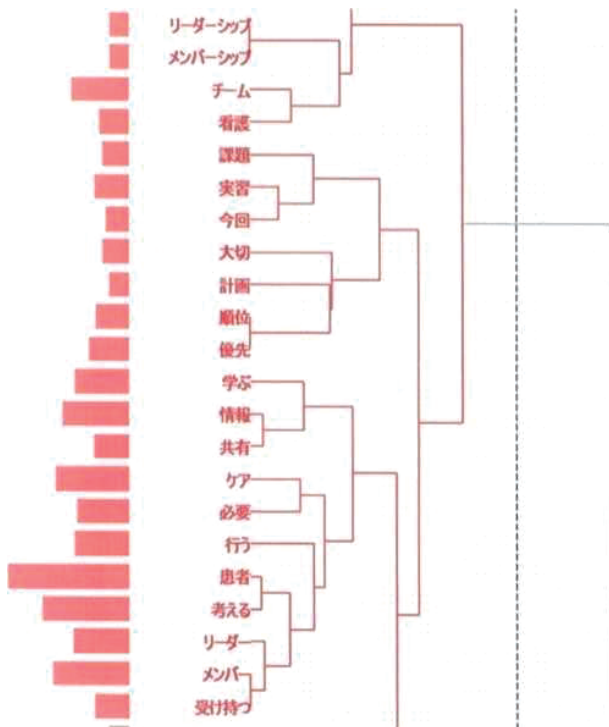


図1 修得状況を示す階層クラスター解析（一部抜粋）

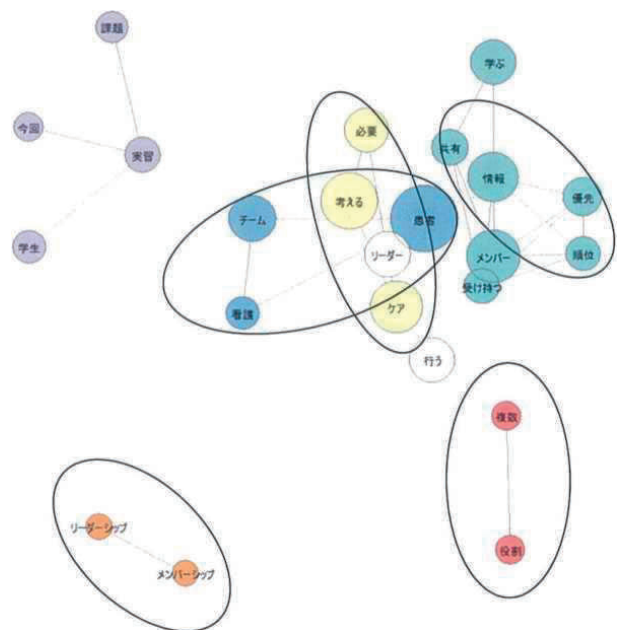


図2 修得状況を示す共起ネットワーク解析

い成果を生み出す。つまり、実習経験から体得したことは、成績評価など外的なものがなくとも「チームを良くするフォローシップがはたらいた」、「チームへ所属することへの満足」、「効率よく質の高い看護の提供につながること」と考える。

2) 総合実習にリンクした看護管理の授業と事前演習

「管理の概説」、「看護管理の概説」の看護管理の授業において、マネジメントとは、組織とチームマネジメント、リーダーシップとマネジメント、リーダーシップの行動理論、エンパワーメント、コンフリクトについて看護管理の授業に使用した教科書¹⁵⁾に基づき教授した。【リーダー・メンバーシップの経験による学び】、【チームマネジメントの理解】を構成したサブカテゴリー<リーダー役割の理解>、<リーダーとしての根拠に基づくケア計画の重要性>、<メンバー役割の理解>、<看護管理の授業と総合実習の統合的理解>が、教授内容と合致する学生の修得状況と考えられた。

事前演習では、「リーダーとメンバーの役割の把握」をチーム運営から経験するようにした。これは、【リーダー・メンバーシップの経験による学び】、【チームマネジメントの理解】を構成したサブカテゴリー<リーダーの難しさ>、<チーム運営の重要性の理解>、<時間管理と臨機応変な対応>が、学生の修得状況と合致すると考える。

2. 多重課題のマネジメント

1) タスクワークからみた多重課題のマネジメント

タスクワークである複数患者の多重課題のマネジメントについては、【報告と情報共有の重要性の認識】、クラスター解析の〔患者のことを考えて情報共有し、必要なケアを行う〕、共起ネットワーク解析の〔複数の役割を持つ：多重課題をこなす〕、対応分析の第2象限〔(患者の)状態を理解して指導者に伝える〕、第4象限〔対象の(状態を)判断する〕、〔看護管理では状況を見極めることが重要〕にあるように、タイムリーに情報をつかみ看護師へ報告すること

によって、確実に複数患者のマネジメントができる。その困難さの認識が【多重課題・複数受け持ちの困難さの経験】の<複数受け持ちの困難さ>、<複数患者の把握の必要性>として表出されたと考える。チームで取り組んだが、チームメンバー個々が複数の患者の情報を把握する必要があったことに困難を感じていたことがわかった。多重課題の困難さの背景要因として、優先順位を考慮する上で基本となる医学的知識の不足による自信の無さが考えられる。今井¹⁶⁾は、新人看護師が複数患者を同時に受け持つ困難さを「多重課題対応不全」とし、主体性が欠如した表面的学習は医学知識と看護実践がつかない状況を招き、実践レベルで複数患者の看護と多重課題対応の弊害となることを示唆している。A大学においても同様に、低学年からの医学知識の定着の程度が影響したと考えられる。

実習の経過と共に、学生は複数患者の多重課題をこなす、タイムマネジメントを行うことに留まらず、患者にとってより質の高い看護を提供することの意識をもつことができていた。これらは、【報告と情報共有の重要性の認識】、【多重課題・複数受け持ちの困難さの経験】の<情報共有による安全なケアの提供>、<情報共有による質の高いケアの提供>、<複数受け持ちによるケアの質の担保>として表出されたと考えられる。指導者と共に学生が振り返りを行うことで、患者中心の看護であったか、看護業務優先の動きになっていなかったかなど、患者中心の視点を臨地でタイムリーに再認識させる関わりで学生が修得できたと考える。

2) 総合実習にリンクした看護管理の授業と事前演習

「看護ケアマネジメント」、「多重課題のマネジメント」、「医療チームのマネジメント」の看護管理の授業において、看護ケアのマネジメントと看護職の機能、安全管理、看護ケア提供システム、日常業務のマネジメント、質の高い看護サービスの提供について教授した。これらについても、<情報共有による安全なケアの提供>、<情報共有による質の高いケアの提供>、<複数受け持ちによるケアの質の担保>として表出

されたと考える。〈情報共有による質の高いケアの提供〉(表1)の代表データ〈共通認識を持つまでの時間を短縮することで、患者さんへのケアにもっと力を入れることができる〉では、質の高い看護サービスの提供の教授内容とリンクした学生の修得状況と考える。

事前演習は、「複数患者の多重課題に対する看護ケアの優先づけ」、「患者を取り巻く他職種との協働」として、事例患者4名の状況を想定しながら緊急度と重要度、時刻の決まっている処置や他の医療チームとの連携を考慮したケア計画立案であった。事前演習でこれらを経験することにより、臨地実習での計画立案がスムーズであった。しかし、臨地では患者の日々の状態の変化に追いつくことへの困難を認識しており、疾患や状態から予後を見通す知識の不足が【多重課題・複数受け持ちの困難さの経験】から示唆された。

3. 総合実習の成果

1) 総合実習の成果と新たな課題

【総合実習の成果と成長の実感】は、〈総合実習の中での日々の成長(成果・学び)の実感〉、〈総合実習の経験から看護実践を見通した理解〉、〈総合実習の学びや感想〉の3つのサブカテゴリから生成された(表1)。学生が成長を実感できた代表データとして、〈リーダーとメンバーがチーム内でやり取りをして、指導者・先生と調整しながら患者さんに看護を提供しようとみんなで動くことができた。学内に帰ってからも、チームで役割分担して薬剤を調べ、関連図を作成してチームでシェアして翌日に活かすことができた。〉ケアが終わった後や就業後などに振り返りを行うことは重要な成長の機会であり¹⁷⁾、臨地での経験があったからこそ見えてきた世界に振り返りを加えることで、より理解が深まり、自らの成長を実感しながら実習を楽しみ、自身のものとして獲得することができたと考える。【総合実習を経て見出した課題】では、〈総合実習から見出した自己の課題〉の代表データとして、〈当日の行動計画の援助をこなすことで精一杯になり、優先順位・時間管理・安全を考慮した援助が十分に行えなかったとい

う「管理的側面」の不足があった〉が認められた。〈総合実習から見出したチームの課題〉の代表データとして、〈実習を通して学んだこと、考えたことや課題を忘れず、今後、組織の一部として組織や社会に貢献できるように努めていきたい〉、〈丁寧なことはもちろんだが、ケアに費やす時間を短くし、スムーズに行えるようにすることは、患者への負担だけでなく、チーム内での負担や時間を有効に使うことに繋がる〉が認められた。これらより、看護学生から新人看護師へのトランジション期としての総合実習ならではの学びが抽出されたといえる。これまでの領域実習では、对患者という視点が中心であったが、自身の行動を客観視した内省とチームメンバーの仕事量の負担や、労働力を考慮した組織マネジメントの側面から新たな課題を見出すことにリンクしていたと考える。

2) 総合実習にリンクした看護管理の授業

【総合実習の成果と成長の実感】では、「看護職のキャリアマネジメント」、「看護専門職と生涯教育」の看護管理の授業で、看護者の倫理綱領を用いプロフェッションとは、学び続け研究的視点を持ち自己を磨き続ける義務があることを強調し、日々学び続ける必要性を紹介した内容とリンクする学生の修得状況と考える。これらは、学生が実習の経験から統合させ理解したととらえられる。【総合実習を経て見出した課題】では、「看護管理の概説」、「組織マネジメント」、「看護サービスとマネジメント」の看護管理の授業において、患者にとって質の高いケアの提供をするためには、看護師の仕事量やストレスマネジメントを考慮する必要性を教授した。患者だけに目を向けるのではなく看護師にも目を向け、仕事の論理と労働の力学について看護現場の実践例を交えて教授した内容と学生の修得状況がリンクすると考える。

VI. 結論

チームのマネジメントについて、リーダー・メンバーの双方の役割を臨地の経験から学ぶことが多かった。事前の授業で前年の臨地実習での学生の学びを理論に結びつけて教授することで、より理解が促進される可能性が示唆されたことより、

看護管理の授業や事前演習が実習の修得状況に良い影響を与えたといえる。多重課題のマネジメントについて、患者理解の基本となる医学知識に基づく疾患の理解と予後の推論より、低学年からの知識の定着の必要性が示唆された。一方、複数患者の把握がすすむことに加え、指導者がタイムリーに助言を加えることで、マネジメントが単なる時間やケアの調整する業務ではなく、患者を中心とした視点に基づくケア計画へ導くことができた。

さらに、学生から新人看護師へのトランジション期としての総合実習ならではの学びの特徴として、患者への看護実践だけではなく、看護管理で修得した組織および労働者にまで視野を広げて実践していることが示唆された。

Ⅶ. 研究の限界

本研究において得られたデータ数に限りがあることから、総合実習の修得状況の把握には限界がある。また、トランジション期における実習としての教育課題であるリアリティショックへの効果についてもフォローアップデータが必要となる。

利益相反

本研究に関する利益相反はない。

著者資格

M.U. は、研究の着想およびデザインと計画、研究に関する看護管理の授業および総合実習の科目責任者、研究依頼施設ならびに研究協力者への説明を口頭と文書で行い同意を得た。M.U. と Y.S. の両研究者で内容分析および解析の解釈を行い、結果に考察を加え結論を見出した。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に感謝いたします。

付記

本論文の内容の一部は、日本看護研究学会第 35 回近畿・北陸地方会において発表した。

文献

- 1) 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子他: 新人看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方・聖路加看護学雑誌, 11 (1); 100-108, 2007.
- 2) 川西美佐, 眞崎直子, 山村美枝他: 新人看護師が困難になる多重課題場面一看護管理者への調査から一. 日本赤十字広島看護大学, 12; 89-95, 2012.
- 3) 平林優子, 松谷美和子, 高屋尚子他: 新人看護師への移行演習プログラムの改善とその評価—臨床の場を使つての演習と体験者の評価から一. 聖路加看護学会誌, 13 (2); 63-70, 2009.
- 4) 村上好恵, 平林優子, 飯田正子: 新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価—状況設定の中での与薬の基本演習—. 聖路加看護学会誌, 12 (2); 50-57, 2008.
- 5) 寺田麻子, 松谷美和子, 高屋尚子: 新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価 (2)—多重課題シナリオによる演習—. 聖路加看護学会誌, 12 (2); 58-63. 2008.
- 6) 藤田三恵, 丸岡直子, 川島和代他: 卒業前看護学生を対象とした多重課題演習の実態とプログラム評価・日本看護学教育学会誌, 24 (3); 51-61. 2015.
- 7) 今井多樹子, 岡田麻里, 永井庸央他: 学年進行と共に段階的に進める「看護の統合と実践」における教育に関する研究—各論実習前に実施した統合実習の教育的有用性と課題の検討—, 県立広島大学保健福祉学部誌, 17 (1); 31-41. 2017.
- 8) 大島弓子: 「統合実習」の内容と発展を振り返る, 看護教育, 59 (19); 774-779. 2018.
- 9) 三上剛人, 藤野智子: できるナースの動き方がわかる多重課題クリアノート, 第 3 版, 東京, 学研プラス, 2017.
- 10) 看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン 別表 3 看護師教育の基本的考え方、留意点等 (案). 第 7 回 看護基礎教育検討会, 参考資料 1-2. 2023.8.20, <https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000475666.pdf>

- 11) Salas, E., Dickinson, T. L., Converse, S. A., & Tannenbaum.: Toward an understanding of team performance and training, In R. W. Swezey & E. Salas (Eds), Teams and performance. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation, pp 3-29. 1992.
- 12) Morgan, B. B., Salas, E., & Glickman, A. S.: An analysis of team evolution and maturation. *Journal of General Psychology*, 120 (3) ; 277-291. 1993.
- 13) 石川淳：シェアド・リーダーシップ，チーム全員の影響力が職場を強くする．53-67，東京，中央経済社，2016.
- 14) 前掲 12)
- 15) 上泉和子、小山秀夫、覧淳夫他：系統看護学講座，看護管理，看護の統合と実践，東京：医学書院．2020.
- 16) 今井多樹子，岡田麻里，高瀬美由紀：新人看護師が複数患者を同時に受け持つ体制下で直面する多重課題対応不全を生み出す主要因子，KJ 法活用した看護管理者の面接内容の構造化から，*日本看護研究学会誌*，44 (1) ; 31-42. 2021.
- 17) バーンズサラ，バルマンクリス：『看護における反省的实践—専門的プラクティショナーの成長』，2005. 田村由美，中田康夫，津田紀子監訳；10-12，ゆみる出版．2005.